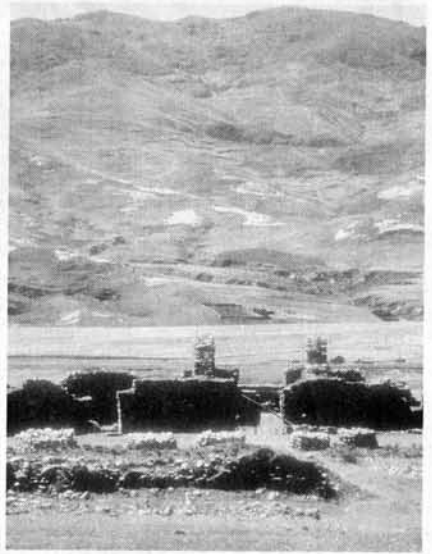
# 偉業の誇示か　インカは「帝国」

## 「征服者の心理」解釈

## 論文集、来春刊行へ

国立民族学博物館

南米アンデスで15世紀後半～16世紀前半に栄えたインカ帝国を対象に、近年の研究成果を検討してきた国立民族学博物館（大阪府吹田市）の共同研究会が今月、3年間の活動を終えた。この研究で、「帝国」と名付けられた背景には、スペイン人の「征服者の心理」が働いたのではないかとの見方が強まってきた。従来の文献研究だけでなく、ここ十数年の遺跡発掘の成果も、研究の進展に大きく影響している。



インカの地域統治拠点だったペルー北高地のワヌコ・パンパ遺跡（関雄二氏提供）

インカ帝国の版図は、ペルーの高地を中心に、南北約4000キロに及ぶ。インカの人々は文字を持たず、国名は現地語で「四つの地方」と言われていた。16世紀にこの地を征服したスペイン人は、現地での見聞をもとに、歴代王の活躍や遠征に関する伝承、文化の実態などを記した文献を多数残した。「インカ帝国」の呼称は、こうした文献に残っている。

その後、欧州で書かれた「インカ帝国史」は、誤解や虚像も多いと考えられる先の文献を素材にしており、ここで定着した「帝国」の呼称が、不断の戦争による拡張、厳しい他民族支配などを連想させ、長くイメージを固定化させてきた側面がある。

しかし、1970年代以降、文献の成立過程や、作者の立場や意図に関心が高まる一方、90年代以降は、インカの遺跡発掘が増加。従来のインカ史の虚実を見分けようとする動きにつながった。研究会ではこの流れを受け、「帝国」と呼ばれた理由などを検討してきた。

稲本健二・同志社大学教授（スペイン文学）は、こう解釈する。スペイン人にとって、かつて欧州を統合したローマ帝国は偉大で、理想の対象だった。このため、マチュ・ピチュのような空中都市や豪華な神殿建築、豊富な金銀などに特徴づけられるインカの文明に驚愕したスペイン人は、インカをローマになぞらえて受け止めた。ローマに匹敵する帝国を征服したことを誇示したかったのだろう。

「『王国』の呼称もありえたが、すごいという印象を表すのに『帝国』がぴったりだったのでは。実像はローマのような帝国と異質な点も多いはずで、発掘資料も使い、明らかにしていきたい」。染田秀藤・大阪外国語大学教授（ラテンアメリカ史）は語る。

また、文献ではインカの王が戦争で各地の勢力を統合し、民を強制移住させたとある首都周辺で、発掘の結果、城塞や移住地の遺跡が出なかった。こうした事実から、「地域によっては、統合が徐々に平和裡に行われた可能性が高くなった」と、研究会代表の関雄二・同館教授（アンデス考古学）は指摘する。

王宮の発掘成果と文献の照合から、王の死後も、その王宮が維持され、臣下も生前同様の活動を続けていたという、特異な慣習があったこともわかってきた。

来春、約20人で執筆する論文集が刊行の予定。発展途上のインカ研究の成果が待たれる。

（渡辺達治）